

令和 6 年 5 月 22 日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02735

研究課題名（和文）教科融合による豊かな読書空間の創出 - 理論と実践の往還的研究 -

研究課題名（英文）Creation of a reading space through fusion of subjects:A reciprocal study of theory and practice

研究代表者

花坂 歩 (HANASAKA, Ayumu)

大分大学・教育学部・教授

研究者番号：20732358

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：深川明子によって記録された1980年代の授業実践を紐解きわかったことは教室において虚構と現実の垣根が取り払われることで、あたかもそこにいるかのような自己が現出し、友人らとともに、仮想思考を展開していたということである。また、感受性の開発に注目した身体操法について整理し、論文にまとめた。論文においては、空間に呼応する身体とはどのような身体なのかを考究するとともに、そのような身体に近づくために必要な訓練について言及した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大分県内の公立小学校にて理論研究に基づいた教科横断的な授業を試行した結果、学習者の日常と非日常の境界線上に位置するような教材を探索もしくは開発して用いることで、その後の話し合い等が活性化することが示唆された。また、音読・朗読に関する大学公開講座を研究期間中で96回開催し、理論と実践の融合を試みた。この他、昭和初期に展開された久留島武彦の「口演童話」を調査した。久留島武彦は大分の先哲であり、その史的研究によって、「語る身体」についての知見を集約することができた。

研究成果の概要（英文）：I analyzed the teaching practices of the 1980s recorded by Akiko Fukagawa. What I discovered is that when teachers conduct classes that break down the boundaries between fiction and reality, children experience as if they are in a fictional world and develop creative thinking with their friends. That's true. I also wrote a paper on physical exercises that focused on developing sensitivity. In that paper, I considered what kind of body is a body that responds to space, and wrote about the training necessary to approach such a body.

研究分野：読書空間論

キーワード：読むこと 教科融合 読書行為 読者反応

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者の学術的基盤は読書における受容美学(主にはドイツのW・イーザーによる現象学的読書行為論)にある。これは「私(読み手)」と「読み物(テキスト)」との2者間の相互作用を考究する学問で、近年は、読み手そのものや他者との交流をも含めた読者反応理論へと拡張的に発展している。

(2) 研究代表者はおよそ10年間(2002~2013)の高等学校勤務の経験がある。その間、学習指導要領に留意しながら、子どもの多様性を出現させる授業の開発に取り組んできた。近年は研究のフィールドを拡張し、国語科の授業以外で行われている読書教育を調査している。そうしたフィールド調査から、読書行為に影響を与える環境要因(状況性)に大きな関心を抱くようになった。

(3) 研究代表者は、現場教師との共同授業開発、地域の読み聞かせボランティアへの実技指導、音楽、美術、生涯教育の研究者との学術交流に積極的に取り組む中で「学びのリアリティ」というキーワードを強く意識するようになった。日常の読書行為は教室内のように制御された空間で行われないのが通例である。生涯にわたって読書に親しむ読書人に育てるためには、他の学問領域や地域を巻き込んだ授業にしていく必要がある。

(4) 関連領域としては、山元隆春(広島大学)がR・ビーチの米国の研究成果を取り入れながら、絵本の学習材価値や活用方法を探究している他、寺田守(京都教育大学)が小集団における読みの指導について理論的・実践的に研究を進めている。また、足立幸子(新潟大学)はそうした小集団の読みを基盤に評価方法を研究している。本研究においては、それらに学びながらも、読書空間創出のための広域連携を企図している。特に、音楽・美術との連携によって読書空間を創出するという試みは管見では確認できず、本研究の独自性でもある。

(5) 広域連携という点においては、社会教育の現場でも読書活動は推進されてきた。現在も、「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」(2002)の他、「学校図書館法」改正により、学校内外の読書環境は着実に整備されつつある。しかし、これらは地域と学校との連携を主眼とするものではない。本研究においてそれらを統合したいと考えた。

(6) 学習指導要領においては、次世代に対応するグローバル人材の育成を目指し、教科横断的(融合的)な視点、家庭・社会との連携、学び続ける力の育成がよりいっそう求められている。本研究はそうした動向にも対応するものである。

2. 研究の目的

本研究では研究課題の核心をなす「問い」を以下のように設定した。

読書行為は、想像を拡張させる音楽と想像を具体化する造形物、そして、その体験を刻印する言語化を連動させた授業によって、生涯にわたって持続する実効性をもつのではないか？

上記の「問い」に基づき、本研究の目的を、3つ、掲げた。

(1) 本研究によって、読書行為を取り巻く空間性(状況性)についての考察に取り組み、その拡張のための基盤を固めたいと考えた。これまで、読書は国語科という狭い学問領域で検討されるばかりであった。研究代表者のこれまでの研究成果から、読書を本(テキスト)との対話に限定せず、音声化(音読・朗読)、動作化(演劇的手法の活用)といった身体性との連動を図ることによって、実感を伴った思考を生み出すことがわかっている。新たに、研究分担者として音楽科教育の石出和也(北海道教育大学)と美術科教育の藤井康子(大分大学)を加え、読書空間に音(聴覚刺激)と造形(視覚刺激)を加える。音は人の気持ちを高揚させたり、落ち着かせたりする。音の現象性について研究を進めている石出とならば、読書行為に寄与する音の活用を検討できる。また、藤井は言語と感性の教育に取り組んでいる。藤井とならば、読書の想像を拡張させる視覚化が実現できると考えた。

(2) 本研究によって、現場の実践家との共同研究体制を確立させたいと考えた。研究代表者はこれまでも現場教師とともに多くの授業開発に取り組み、教育現場に学術知見を波及させてきた。本研究においては、それをより大規模に行っていく。上述の研究分担者(石出、藤井)の他、子ども観察や教師の力量形成について研究を進めている大島崇(大分大学)を研究分担者に加えることで、理論と実践の往還がよりいっそう図られると考えた。

(3) 本研究では、戦後の国語教育実践の整理と再構築を試みたいと考えた。研究代表者は1970

年代から 1990 年代の文学教育の通史研究に取り組む中で、当時の授業が子どもの「つぶやき」を重視していることを見出している。当時の教師たちは子どもの「つぶやき」を引き出し、紡いでいく中で、子ども（読み手）のイメージ形成とクラスメイト（他者）とのイメージ共有を目指していた。これは現代が求める主体的学びと対話的学びの先駆的追究であるといつてよい。また、異なる文化との共生が求められる近年において、疎通という関係性は極めて重要になってくる。「イメージ共有」という切り口から、現代への応用性を検討したいと考えた。

3. 研究の方法

(1) 主には文献調査によって研究を進めてきた。研究代表者は我が国の国語科教育におけるイメージ形成論（1970～2000）について、深川明子（金沢大学名誉教授）の研究足跡を中心に通時的にまとめてきた。その中で見出された授業記録を詳細に検討することで、イメージ形成・共有を試みた教師とテキストの関わり、教師と子どもの関わりをより鮮明にしようとした。また、教科横断的な授業を実現していくための考察にも取り組んだ。1970 年代からの文学教育の課題の 1 つとして、文学作品の世界観の受容に指導が偏ったことが挙げられる。芸術分野との共同によって、教科の垣根を超えるような指導内容・指導方法を考究することとした。

(2) 上述の理論研究・基礎研究を踏まえた実践研究によって、理論の検証と改善を試みた。実践研究については、大分県内の公立小学校の協力を得て、年に複数回、さまざまなアプローチによって教科の垣根を取り払うような授業を実施してきた。現場教師、教育行政とのネットワークの構築と同時進行で、社会への波及・貢献を効果的に実現していこうとした。

4. 研究成果

(1) 授業実践に関する史的研究については、総括としての論文「言語と思考と体験を豊かにする虚構体験の構造化 - 巻き込み・巻き込まれ現象の具現化 - 」にまとめた。1980 年代の記録を見ると、児童らは教師の投げかけに促されて、同じ教室空間にいる友人らとともに、そこに無いもの（イメージ空間）を生み出していた。さらには、虚構と現実の垣根が取り払われることで、あたかもそこにいるかのような自己が現出し、様々な思考を展開していることが確認できた。論文では、これまでの「イメージ形成論」の整理を示すとともに、音の現象性について研究を進めている石出和也の研究成果を踏まえ、読書行為に寄与する音の活用について言及した。

(2) 論文「教科越境的な学びを引き出すための国語科所収教材の研究 小学校国語科「世界一美しいぼくの村」を例に 」においては、国語科、社会科との融合を図るための教材研究についてまとめた。これは教科融合を進めるための基礎的理論の研究成果である。

(3) 大分県内の公立小学校にて教科横断的な授業を試行した結果、学習者の日常と非日常の境界線上に位置するような教材を探索もしくは開発して用いることで、その後の話し合い等が活性化することが示唆された。また、学級全体でイメージ空間を作る上で、引き寄せ・引き受け・引き渡しという指導概念の有効性が示唆された。現場の実践家との共同研究体制の確立については、当初の想定を上回るほどに進めることができたと考えている。

(4) 生涯教育の充実及び学校教育との連携の観点から、公開講座を開催した。研究開始当初はコロナ感染症への対応のため、思うように実施が叶わなかったが、オンラインでの開催を模索する中で、県内のみならず関東や北海道からの参加も引き出すことができた。

(5) 感受性の開発に注目した身体操法について整理し、論文「音読・朗読のための弛緩発声法の研究(2) 心地よく響く声に出会わせるための身体アプローチ 」にまとめた。読書空間の豊かさを相乗的に高めていくためには、授業者による工夫のみならず、学習者との協同が不可欠である。上記の論文においては、空間に呼応する身体とはどのような身体なのかを考究するとともに、そのような身体に近づくために必要な訓練について言及した。

(6) 研究開始当初は、1950 年代の「生活綴り方」に関する資料を整理し、2022 年度に成果としてまとめる予定であったが、文献調査を行っていく中で、特に、昭和初期に展開された久留島武彦の「口演童話」が読書空間の創出に大きく寄与するのではないかという思いを抱くようになった。久留島武彦は大分の先哲であり、その史的研究は大分の郷土教育の発展に寄与すると考えている。

なお、藤井康子とは国語と美術（図画工作）の教科融合の検討を続けてきたが、読み取る、声にするといった「読み」の領域と、作る・味わうといった美術（図画工作）科の融合は年間指導計画上の調整が想定以上に困難であるとともに、研究協力者に国語と美術の両方の専門性が求められることになり、実務レベルでの実現が極めて困難であった。今後の課題として、研究を継続していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計28件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 25件）

1. 著者名 花坂歩・石出和也・大島崇・藤井康子・佐野比呂己	4. 巻 12
2. 論文標題 言語と思考と体験を豊かにする虚構体験の構造化:巻き込み・巻き込まれ現象の具現化	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 九州国語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 22～31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花坂歩、安道百合子、清水慶彦、石出和也	4. 巻 44
2. 論文標題 「体験としての古典」を具現化する授業実践研究:音楽による異空間創出の試み	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大分大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 181～193
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.51073/17110	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 花坂歩、衛藤俊明、釘宮泰代、河野晋也	4. 巻 44
2. 論文標題 「伝承」と「創造」の教科横断的カリキュラムの開発2:教科横断による教科融合の検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大分大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 159～168
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.51073/17062	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 河野晋也、衛藤俊明、釘宮泰代、花坂歩	4. 巻 44
2. 論文標題 「伝承」と「創造」の教科横断的カリキュラムの開発1:ジオサイトを活用した単元デザインプロセス	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大分大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 145～158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.51073/17061	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩崎 朋美、玉野井 ちさと、花坂 歩	4. 巻 2
2. 論文標題 教師に求める音声表現スキルの内容と指導方法：「玉野井メソッド」の報告と検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国語探究	6. 最初と最後の頁 44～55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32150/00010876	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 花坂 歩、成松 千穂、水間 清香、高野 友香、山根 紫野、中尾 雅宏、千田 一晃	4. 巻 1
2. 論文標題 子どもの主体性を育てたい教師のための小考：国語科指導案に組み込むべき言葉の検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国語探究	6. 最初と最後の頁 17～26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32150/00010742	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐野 比呂己	4. 巻 1
2. 論文標題 大学生とのプロジェクト学習：「さけが大きくなるまで」を起点に教科等横断的学習を考える	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国語探究	6. 最初と最後の頁 89～128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32150/00010749	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐野 比呂己	4. 巻 1
2. 論文標題 2022年4月コロナ禍の言語生活：教員養成系大学初年次学生のコミュニケーションに関する意識	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国語探究	6. 最初と最後の頁 1～16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32150/00010741	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐野 比呂己、佐野 理美	4. 巻 2
2. 論文標題 柳田国男監修高等学校国語科教科書における単元「小説」をめぐって	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国語探究	6. 最初と最後の頁 1~11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32150/00010871	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐野 比呂己、佐野 理美	4. 巻 20
2. 論文標題 柳田国男監修高等学校国語科教科書における単元「古文入門」をめぐって	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国語論集	6. 最初と最後の頁 16~30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32150/00010900	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐野 比呂己	4. 巻 61
2. 論文標題 柳田国男監修高等学校国語科教科書における単元「読書」をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 語学文学	6. 最初と最後の頁 5~16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32150/00010813	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 花坂歩・柳谷直明・河野晋也	4. 巻 22
2. 論文標題 教科越境的な学びを引き出すための国語科所収教材の研究-小学校国語科「世界一美しいぼくの村」を例に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中研紀要教科書フォーラム	6. 最初と最後の頁 27-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩崎朋美・花坂歩	4. 巻 19
2. 論文標題 話し手との共創感を強める「聞き方」について コーチング理論からの示唆のまとめ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国語論集	6. 最初と最後の頁 266-275
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32150/00008921	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 花坂歩・千田一晃	4. 巻 19
2. 論文標題 音読・朗読のための弛緩発声法の研究(2) 心地よく響く声に出会わせるための身体アプローチ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国語論集	6. 最初と最後の頁 45-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32150/00008903	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 花坂歩	4. 巻 7(2)
2. 論文標題 読みの授業における巻き込み・巻き込まれ現象の検討 1980年代の深川明子の論文を素材として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 九州地区国立大学教育系・文系研究論文集	6. 最初と最後の頁 No.3(pp.1-11)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 花坂歩	4. 巻 18
2. 論文標題 読書行為に介入してくる現実態の間テキスト要因 柳田国男『海南小記』を検討の素材として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国語論集	6. 最初と最後の頁 47-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32150/00008869	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 篠原諒伍・花坂歩	4. 巻 18
2. 論文標題 特別活動(学級会)に国語科での学びを生かす教科融合の取り組み 小学校三年生の「話すこと・聞くこと」との結び付け	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国語論集	6. 最初と最後の頁 222-230
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.32150/00008883	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 花坂歩・柳谷直明・河野晋也	4. 巻 42(2)
2. 論文標題 国語科教材研究における越境の試み - 「世界一美しいぼくの村」を題材に -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大分大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 161-174
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.51073/16768	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 花坂歩・衛藤俊明・釘宮泰代	4. 巻 13
2. 論文標題 グローバル人材の育成を目指す小規模小学校の挑戦 - 地域の教育資源を活用したキャリア教育実践の報告 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大分大学高等教育開発センター紀要	6. 最初と最後の頁 137-148
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.51073/16790	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 釘宮里枝・花坂歩	4. 巻 38
2. 論文標題 ポートフォリオ評価を用いた自己調整力の育成 - 中学校国語科の通年指導の記録の検討 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大分大学教育学部附属教育実践総合センター紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.51073/16759	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 花坂歩・千田一晃	4. 巻 13
2. 論文標題 首読・朗読のための弛緩発声法の研究(1) - 身体の弛緩と発声・発音の基礎 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大分大学高等教育開発センター紀要	6. 最初と最後の頁 69-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.51073/16783	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松岡朱・花坂歩	4. 巻 42(1)
2. 論文標題 国語科授業における単元ゴールの設定と振り返り:引き寄せ・引き受け・引き渡しの試み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大分大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 29-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.51073/16716	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 釘宮里枝・花坂歩	4. 巻 17
2. 論文標題 生徒の自立を促す自己評価サイクルの開発と試行 - 運用可能なポートフォリオ評価を目指して - ,	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語論集	6. 最初と最後の頁 202-210
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32150/00008863	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 花坂歩・藤井康子	4. 巻 17
2. 論文標題 生活実感から言葉を芽生えさせることの試論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語論集	6. 最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32150/00008845	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中尾雅宏・花坂歩	4. 巻 17
2. 論文標題 現代を生き抜くための作文指導についての一考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語論集	6. 最初と最後の頁 85-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32150/00008851	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤井康子・花坂歩・永松芳恵	4. 巻 54
2. 論文標題 中学校美術科と国語科等の教科融合型学習の研究 (3) : 故郷の色をテーマとした学習の成果と課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本美術教育研究論集	6. 最初と最後の頁 139-146
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花坂歩	4. 巻 573
2. 論文標題 教師による学習材化を念頭においた『スイミー』研究の再構築	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 月刊国語教育研究	6. 最初と最後の頁 42-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大月さゆり・佐野比呂己	4. 巻 51
2. 論文標題 学校図書館の活用による授業改善	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 釧路論集 (北海道教育大学釧路校研究紀要)	6. 最初と最後の頁 53-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐野比呂己
2. 発表標題 コロナ禍のコミュニケーション意識
3. 学会等名 釧路国語教育学会8月例会（第126回）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 花坂歩・藤井康子
2. 発表標題 美との出会いによって生み出される内的現象の言語化への試み - 教科融合による「振り返り」の分析 -
3. 学会等名 釧路国語教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 花坂歩
2. 発表標題 「読書」における巻き込み・巻き込まれ現象の検討 - 1980年代の深川明子の視点から -
3. 学会等名 九州国語教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 花坂歩
2. 発表標題 読書が引き起こす“イメージ空間”創出のための手探り - 深川明子の視点から -
3. 学会等名 釧路国語教育学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	藤井 康子 (Fuji i Yasuko) (10608376)	大分大学・教育学部・准教授 (17501)	
研究分担者	佐野 比呂己 (Sano Hiromi) (60455699)	北海道教育大学・教育学部・教授 (10102)	
研究分担者	大島 崇 (Oshima Takashi) (70715276)	大分大学・大学院教育学研究科・准教授 (17501)	
研究分担者	石出 和也 (Ishide Kazuya) (90552886)	北海道教育大学・教育学部・准教授 (10102)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	釘宮 泰代 (Kugimiya Yasuyo)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------